







繪本右圖記に篇卷之記

目録

秀吉先秀系天王山話

山崎合戦話

信丹吹慶裏切先秀陣話

先秀敗軍話

惟任方勇士等討死話

Vertical text on the left margin of the left page.





繪本を附記に篇巻之四

秀吉先秀争天王山

去程より秀吉先秀争天王山  
 五千人旗旗風よひるより槍刀雲と黄き十二日の夜に入らば陣敷を  
 鞆坂林貫つて曉をこそつたつて附り羽柴流石守自ら陣敷と申  
 ひしく敵の陣を地の廣狭を明見し移ひ管のゆうて堀尾氏のみ  
 をる直つたりし秀の戰場山とて下と二筋の乃あり一万余人の皇兵  
 と多降弓換炮を殺多持せ只今より急ぎ彼山とのる瓜經て天王山  
 の山は地より戰場と眼に下り明の表陣合戦の時敵兵の心中を  
 一息二息敵くおとすまは地ちうい急敵方陣亂れ只一時又切筋は  
 明日の勝ぬは只け天王山をえとえくごうとの間より敵味方さまの争





地をいかにするに困る如くは日比本を信じては生ぜざらん  
 を受けし大佐を命じりて又く天皇の命に依りて明日の軍は大勝とな  
 せよと命じりて之を知りて後尾谷に居りて又く鉄炮の兵五百余人騎馬  
 の兵三百人の勢三百余人都合千余人を引率し飛ぶとく又地をうら  
 別は之の上を越え秀吉の心算として將く休ませしは多う又思惟し後  
 中より先秀軍砲をぬらうるに老功の武をふるに彼が方より天皇の命を  
 傳へし計に依りて後尾谷の心算はとて急ぎ後尾谷に即ち秀吉と  
 後尾谷に命じりて又く命じりて是下を勢を引く彼らに向ひ後尾谷を合  
 せしと委く申し後秀吉の委細を承けて又百人を引率し又天皇山へ  
 と馳りたる附は敵方の勢大なる惟れ先秀山の旗大なる松田左郎左衛  
 門政道とてやうなるは武勇を以て信じてるに又秀吉の命を以て大に

を命じて之を後尾谷の兵數百を引率し又くこのより天皇の命に依りて  
 之を下し敵味方我の勝る所とすうの附は後尾谷をつらけは又秀吉  
 打ち交ひ敵の敵味方の勝利明日の合戦は天皇の命に依りて後尾谷守  
 武の命に依りて信じて天皇山軍勢を以て信じてるに又秀吉の命を以て  
 天皇山の敵味方の争地を以て信じてるに又秀吉の命に依りて後尾谷  
 松田左郎左衛門政道とてやうなるは武勇を以て信じてるに又秀吉の命を以て  
 後尾谷の命に依りて信じて天皇山軍勢を以て信じてるに又秀吉の命を以て  
 山と軍勢と置し後尾谷の命に依りて信じてるに又秀吉の命を以て  
 後尾谷の命に依りて信じて天皇山軍勢を以て信じてるに又秀吉の命を以て  
 月を以て信じてるに又秀吉の命を以て信じてるに又秀吉の命を以て



は終つて天王山の終頂に登り暫く息を養ふとる前に山の方面は  
より松明敷百接續け松田が勢より余人多しとて素とより素の堀尾を  
を刃を扱ひ先秀方の兵士只今山上馳下るを彼をきて退落せしる余  
命を右のちちり馬鉄炮の先先符先を操り去法の場合を足合せたる松田  
が軍勢のかくとも知れぬ二五三の馳下る堀尾は堀尾が兵士敵の軍兵  
の馬中へ一倉よどめと馬鉄炮を打ちつければ松田が勢忽ち百騎計おたをさ  
るまで刃を分るまで大お松田を即ち傍門軍扇を開き大馬お上り先秀  
この後遠り羽柴方より出づるはとて是れをさと敵よりきて  
まは合戦味方の敵も多くの中より撰み出されしを即ち傍門に向ひる大  
の場なるぞ命と捨くしとの敵を退し味方の軍勝利なりし先秀  
この感賞を蒙るとよやととの七分は値を立一足も刻々と申すは

は軍砲の勇奪ははし鉄炮の片先と操り去尻と並べんぐは戦ふは  
飛らぐをまわひれはる所の穂の風は丸くより程勢しす時計もい  
くれど又も勝負も刃をればは松田を即ち傍門大馬の怒り云甲斐  
のさき者どもがうらむひるは押登り只一息は敵勢を退落せよと  
自先馬を進め雨霰と飛来り鉄炮を少し恐れど惟但軍の  
命と受け松田を即ち傍門に向ひる敵の軍は小見集せんとし中  
大馬お上り素とれば堀尾も馬を廻し羽柴の功長堀尾茂久を  
とより素にお結り素れ中と素をうけ素陣互は槍合せ突くと  
薩々命知れぬ戦ひる素勢は討ち若三百余人命を蒙り若救と  
知れはけ耐南のふの下より羽柴方の後援堀尾を即ち傍門大馬  
炬火を灯し連一系に馳下れば堀尾茂久は是とてく敵味方を見



と後踏をうけ来る者い誰なるを先進する兵士多ぶよ  
塙体を即秀政秀吉後の中知より後活のふふ向うと吸りく  
廻るとい塙尾の大きな勢はつらう急に中絶して左右  
つれいしけ秀政の戦いを傳ふ秀政は形をそ松田が勢は向うと見  
しけ後炮の兵三百余人筒を並くお例せば敵の軍勢ひしくと打控  
と表しし松田を即左衛門胸板は玉つ出向馬より落ちて死  
るる塙が軍兵炮烟の下より扱つて切てうれ松田が勢大なるを討  
何ぞ惜もなるべきらふはしてさういあるを塙塙尾大勢近  
二日よと追討を討う者救を知り先秀が本陣とさんぐ  
ゆめく引たる此時洗は富中越後も明かんと  
山崎合戦

山崎合戦

此時洛中洛外の人百姓三百余人先秀が地子御免の恩を感  
務く思ひくの献物酒肴菓子のおいをおく一歩の陣はあけ  
を先秀の腰に腰をうけ彼の人百姓と近く石を合を合を合を  
けりそ多りたる糸井妙のま今日の一戦は羽柴が勢と悉くお破  
天は春平わしは汝等よ愛く恩を合を合を合を合を合を合を  
多せ一角番の基は積るふ食て喰んとせが此時先秀の心は  
うの程とはあうう喰いこれい救まの町人百姓ををを天  
勝つたのぶるまひやお軍は昇進といは角番といはも喰は  
かうやまごまましく其ころ町人の中は多老なる宰士のあ三人  
がけ伴と刀を戦いの始らるる以義は太おめくおめく明丸の破軍の相  
かうけ軍心ははははやく内天と山の軍破は士率さんぐよめて本陣



逆来し三百余人の所人百姓大に驚きさる唯任方救せしむと思ひ日向  
 守之勝ともいふと押合突合我先よと京都にて逆ゆる羽羽柴方の  
 旗をすう先秀が後陣の勢裏明とせしむるを勤めくといひ程こ  
 そは逆軍中河勝須賀加藤後藤片切浦坂が皆勇まといいで推し  
 らんとといひ先陣の大おる山塩川山橋の南門を堅く閉堅り味方の  
 兵士ともいふ合戦をいじむるまぐり人も是と通さば是のお計まおぬ  
 と是に先陣の争論ぬく接無とせしむるは惜らばとて扱こそ  
 かくの南門を閉りたるをさる山塩川山橋の南門を閉堅りたるは心せしやと  
 候も者ありたりとぞお計ま入るも通て接無心け番は我ひと  
 秘うんとせしむる人も兵士を通さばは接無心け番は我ひと  
 を秘へべきとて討當中討天を既し明らんとせしむる山右近も力の

朝を脱し休れし腰を無目か閉て勇気と云ふ後藤塩川約者も日向  
 ちま阿部仁右衛門等馬と引きせ捨死突て何事も目づく麻んは我  
 兵又いま接するをいさる山右近村八郎ちまといふ者あり是も右近  
 兵遣うは末路にのこわたりたりがけ討するが是に來り跪きてやたり  
 是も我義の波に難きものいせしむる君の刺めを承り度かと申はる山  
 河のぞとらふ舟利ややうい君勇智の名も者いといは遠國地ををえり  
 他は求むと扱れよせしむる知成場とて恩顧まといは懼らば況や善代相  
 傳のあつみ君の機略もお成中べき者と討後討らばはる人並の御用  
 も無き道は素は扱ひといふ人教たりぬ侍は捨去らばとせしむる御用にも  
 はしきと思はるよりて是れも小来今款を御陣を破り只今の合戦は御用  
 にまはるる蓋ての御用はこれ遠ひも不忠とて扱らば又是もあはれとせしむる



懐痛をまひ耐の武士のあふ先祖をほしはのそ不孝とては不忠  
 と不孝との罪二の物つゞきくひんと素直にひひちる山はくく  
 尻目小刀々々懐きつゞき申ははと掻込「難か」動くと刀次が大事の  
 若の小子味方の兵刃と切捨んも不忠と服をまぐりて殺て懲せ  
 耐よ東雲陽守後き款合御近くちれ右近耐はよとち知代他人殺  
 を標物、懐をまひ山方の先陣殺後因孫女明智十郎在湯門奥田宮内  
 名も日どく陣をまら支勢一日はあへく物かて固の志をよるとひじく  
 後炮師の兵華侍先を並双方より一日はお放しつり幸い山岳を動し  
 焔硝の烟の雲のおく互は多舞の孫兵のれい槍を不やより久ん忽は  
 括とあひ突くく我ひの花の蒼壁ひて毛ぞと橋大合戦のよはじり  
 は耐の甘利節をま槍掲けてる山馬のそに大書掲げたら不忠の

罪つゞき拾ひ着くともはつとふさだかまひくをさせる御悪もはる  
 まどきう怯弱不孝の罪をく補ひ難いも我の並を御流せよと云  
 捨く後炮の後に付く組師の要むや否や一處は飛出兼烟油く款乃  
 多目も刀へさる中へ槍をうらつと投入吊合戦の先陣を山家の一番槍  
 甘利八郎をまらつて我のゆくと名系も殺ど殺後が物取倉持をま  
 と槍を合せ馬より中実隊「首をえてまらる」牙倉持治郎兵衛連  
 はじと槍をよく実隊を甘利後隊の強兵のれい舞くく叩き付兵一槍  
 又実例、二つの首級をたたくる山が若に馳逐し連も不忠を殺とよ  
 と一處は一處首二處首もはひちる心はと刀々くも挿と実隊せ  
 夫士の並流せるふも後よ若の罪を去れと甘利が河の激よ不れ之槍は  
 其不れとなく我流とつらつら勝若るる山が今日の始末良お



の位とわう叔も敵を討つに勇士破陣陣に河内源治守後及此  
三郎多賀新九清門を山重及久徳六九清門を志先に進んで死と事  
よぞる山塩川紐下の勇士も我を討つと勇と戦ひ双方の戦は強兵を  
を輝きてぞ接戦と南方の三陣中河勢平清秀勇敵の別おるに  
山が南門を開くと刀をくち勢六百人急よ知して体を繰り自志先  
馬と馳出り北方の右衛門又郎佐勢と三郎市牧三九清門橋井新  
又九清門等と三百人中へ志又字に討て無り信長云の吊合戦かく  
こそろまふ物なれ群る敵を突立く自の波を揚て戦ひに南の勢  
の目孤懸ぬ身三陣を討た母に敵の九清村と和泉守山本討馬  
守山入は回ると三郎進士也九清門等と三百人の体と目ける勢三百  
余人圍孤懸り鉄炮をおうけ槍刃を帯てお戦ふ三方の合戦討つて

く叫喚く突合の川果はとも刀をさうする時と惟但光秀急く溝尾  
平兵衛並河掃部両人を討て今日の合戦心とあつて天王山之今羽柴乃  
良名堀尾茂成味方のお松回を討く山上を奪え只今合戦のそ中  
は天王山より鉄炮をうけ味方の体を討崩さしお敵は勢ひを揚者うん  
ぬま入鉄炮の兵又百余人を引具く急ぎ天王山之押寄鉄炮を放ちけ  
山上の敵を討て渡るにわが下の合戦勝利なりと急げくとわ知れ  
を溝尾並河長り軍兵を引陣し砂畑孤懸くと天王山之馳とる其討即  
上越之去後と堀尾茂成堀尾を即ち松回が勢をふの山へ退け討て着  
二百余級今んと砂の合戦も始つて人圍の妻も風よはるにいと大  
おの御中知のおとく天王山の麓より敵の軍兵を討崩せやとて迎ふ敵  
を退捨つて又山上と勢を引上げ遙山下を刀下せり三方の合戦とて



始り戦ひ渡りて見よき堀尾の友人鉄炮の玉込込殺而挺槍を  
たう人垣合死合死不にり山の麓より固死焼つて溝尾並河友人  
美先は馬と罷鉄炮をおひき放ち放ち叫喚を攻とれが堀尾尾勢  
をうらみ此款を上げせしむと再び合戦を始らるるをいふ山よ下には  
不の戦ひ中より美先はけびの着鉄炮の響き上天より轟き打ち合ひを方者  
人馬の叫び其妻の涙は激しくして懸りとも云ん方こそうらうら山方た  
備の陣回と三郎の小回の門系とて尾崎の城を七兵衛射信隆の機槍に  
かま入横死の後美先は死せしめては備の旗取に探されしを限りと  
かりひ多志水加兵衛後河原右衛門を左右に立尾崎より奥に乗り  
兵士七百人美先は進み来死せしむ士率を勵はし今日美先は道とてり  
とも明日誰の面と合ひて死にや者どもは生るとは思ふると美先はまで

和らふふとくけいの一徳人けり知れし村と山本はうりするは  
柳枝系係る居回松本が謀面くは勢を繰出し一切先より火と出  
喚き叫んで戦へお計多勢推崩されし中斬りて死せりはねあぬ  
息を返るが老行相才左衛門係本信兵衛社田加兵衛権備共七郎  
武村小平治行相と三郎等の勇士ををんきこは者ども今日の合  
戦は出合者のかんと思ふを不覚のれ死とてき命の何忍はしと後  
をりるや右大臣の吊合戦討死し信長公の御供せし進めしと  
烈愛せしむる計多勢よりゆき戦ふまでつと勝負ありあうる  
は陣中備人向ひしるる山石垣を破れしむりしとてり之は備の敵の  
名や押入ぬる内務女を旗取として破れ河内後多賀を山久  
徳高が軍勢三万余人山久塩川と勢を合せ一人三子の小勢あり



二陣中河へる山が後を浩と右使又惣門へ合戦三陣を討まふ左  
使は向ひももる山が後と助けは毛又依る山塩川小勢を以て  
大勢は出るが上敵は敵後内飛々尖き事電光の如く勇なる  
神子の怒るよりも勝とうる山が使を以て後より級軍の俸と成  
りり毛先秀が依りつゝの功者兵衛の委きが致と不其成味方を  
三隊は使勇が敵後を以て敵の先陣は向府左右の使は進出  
を以て切布んと依る二陣中河三陣のる計ま左右の使は向我  
ひ先陣も山の後を浩と敵後一度羽柴が先陣を切崩しりの方を  
味方兵士勇とは「怒るよりも勝利を以てさ先秀が軍を以て  
仕業之扱も羽柴筑前守の諸子の合戦心を起り行候を以て固く  
勝級の事は羽柴が依る中河小勢とてども軍威は由まは競ひり

向ひももる山が後を浩と右使又惣門へ合戦三陣を討まふ左  
使は向ひももる山塩川小勢を以て大勢は出るが上敵は敵後内  
飛々尖き事電光の如く勇なる神子の怒るよりも勝とうる山が  
使を以て後より級軍の俸と成りり毛先秀が依りつゝの功者兵  
衛の委きが致と不其成味方を三隊は使勇が敵後を以て敵の先  
陣は向府左右の使は進出を以て切布んと依る二陣中河三陣の  
る計ま左右の使は向我ひ先陣も山の後を浩と敵後一度羽柴が  
先陣を切崩しりの方を味方兵士勇とは「怒るよりも勝利を以  
てさ先秀が軍を以て仕業之扱も羽柴筑前守の諸子の合戦心を  
起り行候を以て固く勝級の事は羽柴が依る中河小勢とてども  
軍威は由まは競ひり



死救を去るに羽柴方の三陣お入敵へ津田村上山幸多と大とらして  
 我々が惟任方勇を討てたる計を勢八百余人討死し既此も崩  
 走りんとし叔も天王の松尾の友人惟任方並河溝尾とせんぐう  
 我ひ岩石を踏み木の根を踏み退止し我ひは火水もぬく我ひは  
 の下をを交朝時彈心生弱き大言ま松尾谷出羽幸多一も七百人  
 菊の方より弛より圍を揚て我と助く松尾尾の軍兵大言ま我ひは  
 水を引取勢とせんぐう退るせ並河溝尾心腹とせんぐう  
 多勢敵難く介も敵の地をわく取の上より切てるは又悔しも後  
 に林藤をして致え此間も降参大言の面くは傍の右のも友田傳又即  
 降参三郎多が中軍と目つけ又百挺の鉄炮を一日よとんとお入け  
 何の悔もたまるべき言上は熱湯と流とせとせんぐう

を中河先より信の敵を切離し勝るるに天王山上か  
 敵の軍中へ鉄炮を打ちつらんを大言と勇まごらん槍を味方と  
 振ると傍の合戦いよいよ勝圍を揚るをらんれくと大言に  
 先は馬と弛ゆ敵を斬り捨も枯野の草を刈り中河が勢一日は  
 圍を焼く報ゆ後芝居は退退け十分勝利を成る惟任方  
 河牧勘兵衛と名乗中河へ槍を合は勢平は大きに叫び只一突は突  
 伏し河牧三九溝門をとりんと馬を走し突参り中河又我ひ  
 一姓一奉降切は火を噴せ飛遠ふくお槍が中河勇や勝らん操出  
 穂先は河牧が眉間を丁と突は槍もなすは馬より落ると中河が  
 良馬もこの回中河活きり考て首取より中河小九溝門も敵の旗をお  
 降参三郎と槍を合せ双方秘術を尽しつらん三郎と突参り首と



きて引くと勢平をどりて大まに勇と一隊の兵士を合せて多く  
獲と岡谷へ切之進もう惟但方の右備かくのどく版取と  
ども中備の分る内務女おとも丸とに芝蘭の軍勢と七八版切  
まより糧も進んで血戦と左備の村上と本津回が来るお討多お  
入つて合款討客の合戦と此のいまも勝敗多し

符年順表裏切光秀陣

唐の玄宗皇帝の時山下安福山丸を配兵兵懼「葉城」刻る常山  
の大守款果卿とつ者を防ぐ力あり長史袁履謙とと者と彼  
安福山来るを待て逆のおとせ出たり丸は福山大に怯ひ款果卿  
合衆の夜をとり果卿おにゆるりそ彼夜を捨て我何を遂に  
のよ方夜と急んやと表履謙死す其心を懼りて河清とも安福山を

討べき係を流し兵兵集め城をうまう指籠る時日教後と七八  
日の内之丸が城のうまも来調いさるふ世の既よ安福山軍お使恩明  
蔡希徳五人使けて軍兵數方を催し推さう款果卿表履謙  
力を盡し防ぎ致ふとも兵精長く矢種も盡す遂城を棄る  
と三人も款のおふけ捕さうり時よ安福山を逃く引と大に怒り  
中より我日來汝多と希とよらとて常山の太守と「判友」とに  
るい寒く我吹降と休があん今其恩を忘れ我よりを引多くと云款  
果卿善て汝の官列の下民とて羊と商の者とを帝汝を石とて三  
道の節度使と成し限りのき大恩を蒙りし何のあより帝よ背  
きく我逆心を企て天下を奪んとと休や我は唐朝の臣下之何を  
殺す人よよと云き只うむむい汝肉を食いさうのをよく我首を刎



と罵つたに後山火きり怒りて敵果御義履深を極め終り付陣を収  
 て吾隊援よ美人自息の経ぬ限りの志ありて死にたりとぞされしが大和の國  
 互舟舟吹差り光秀が噴拳より一團の守とありされどもいんを  
 や敵隊よ多と三二万余人八幡洞に陣に出張し今朝より遠見をつら  
 と陣の合戦を知りせりふ今ふ時をよれと二万余騎を三に分て後原  
 家争代の大旗を上げしとげ令のふ和の馬を諸の梅八のにすは先陣に  
 宇田切宮内小泉に即喪後及女等三万余人三陣に飯田三郎次郎上  
 十郎三子余人率陣に和原右衛門松倉右近衛左近衛宗氏にては  
 余人洞と陣と押りり光秀が率陣にて一万余に推せりり益て内藤女が  
 謀計を致して大八郎柴田源九衛門三万余人地の敷屋に埋伏し今  
 やくと和原より三が陣勢の先を少中りして二度と陣と後り三弓矢槍と

ひしくと打ちけ火煙の中より團を催し切てくれが思ひかけるき大和  
 勢宇田切森小泉等右衛門左衛門切崩されり負死人二百余人徹屋みぬ  
 る故に三陣飯田上佐を固め團の勢を合せ自ら先陣にて挑戦  
 柴田敵勇を震ひ合の別門探合を命と捨て妻付るされども  
 敵の大軍味方小勢亦も二度目の戦ひあり討り者殺を志しに飯田  
 井上の二人柴田を固め切てくれが源九衛門美人の槍を合せんぐみ  
 戦ひが深き三ヶ所負て死に老うくれの多るに致して大八郎一万余人を  
 と喰ひて打ちく守切先より火を放物と必死に死に死に死に飯田  
 井上の美人百余人討き殺して柴田源九衛門の負をくもれ退き  
 槍をえく敵七騎突て瀕死の種先も突打ちに力と扱て切ておる  
 井上が美人百餘と九郎長刀を名て斬倒しを飛来り瓜割りけく付令



美ゆき右の腕を切落し、身をけり首をえを執り、去てあ方より此本陣を  
突、本陣が子忠、飛一系に馳来り、群る敵を切らひ、身を救ふ、刻たつ  
敵、後、多くの敵、隔らば、此本陣危うなり、しりも、知、此、進、人、を、我、ひ、け、り、か  
大和勢の勇士三十余人を討、九、難、兵、の、殺、を、去、り、其、身、も、殺、す、不、可、な  
負、ぬ、と、退、く、心、を、息、も、なく、切、入、り、此、勢、と、差、違、へ、ん、と、進、進、ん、で、我、ひ  
ら、り、此、勢、此、陣、と、ん、く、旅、中、よ、お、お、し、て、く、れ、く、と、呼、り、れ、れ、松、倉、と  
始、り、し、宗、後、の、兵、士、三、十、余、人、敵、後、勢、を、中、に、是、に、引、襲、で、一、人、も、憚、ら、ず  
擲、ま、く、切、ま、れ、元、来、小、勢、の、敵、後、う、れ、れ、後、率、殺、多、討、死、し、生  
あ、る、者、は、皆、勢、を、隔、ら、ば、今、日、大、八、郎、只、一、人、あ、り、な、れ、も、今、日、と、限、り  
と思、ひ、定、め、来、る、れ、い、し、も、驚、く、は、日、比、の、割、力、好、む、大、吉、力、共、向、ま、う、じ  
あ、る、を、幸、と、難、逢、し、の、恐、は、く、中、に、お、換、之、今、日、兎、も、打、落、さ、れ、を、擲、り、切

裂、且、大、量、ふ、め、て、我、ひ、ら、る、が、何、れ、此、勢、と、は、遠、く、死、し、し、ん、此、上、の  
本、陣、を、ら、め、と、亂、れ、勢、を、面、よ、ふ、り、ま、け、首、一、つ、擲、く、大、和、勢、は、終、つ、て、本  
陣、へ、志、の、ひ、入、り、此、勢、と、此、陣、三、度、斗、に、あ、り、て、あ、い、や、と思、ふ、不、可、な、橋、た、近  
友、之、の、言、前、より、放、て、敵、と、我、り、は、此、勢、不、可、な、難、も、何、れ、敵、人、と、傍  
と、此、勢、は、け、り、が、敵、後、を、来、る、を、見、く、を、う、け、置、よ、近、付、者、の、敵、後、大、八  
郎、と、刀、を、う、め、く、い、の、橋、た、近、を、ま、ち、る、ぞ、迎、じ、若、く、と、ま、る、九、日、秀  
若、う、獨、り、門、を、難、刀、を、振、奉、り、討、く、無、れ、大、八、郎、刀、を、斬、り、さ、れ、し、は  
橋、と、思、ひ、持、つ、首、を、投、捨、い、と、見、来、と、大、吉、力、お、り、し、射、斗、も、我、ひ、が  
大、八、郎、も、負、傷、を、遂、に、た、近、に、討、つ、る、生、奉、女、又、敵、之、此、勢、た、近、り  
三、不、可、な、も、お、お、ひ、り、友、を、ま、り、せ、い、此、勢、が、命、危、う、く、ま、は、智、勇、の、士  
い、難、難、お、き、家、の、定、ま、り、扱、り、大、八、郎、討、死、す、り、な、れ、惟、何、方、え



ぐよ故心して得舟勢渡川の傍と追討お首首百餘級松倉右近秀  
 吉の平陣持遠て実徳よこそ使ふる後と傍の合戦終りて秀吉の  
 二の順を今度の戦ひに戦功ありとてあ陣の勝負を合戦終  
 りた方々味方世の五三の志とい思ひ終らざるれが六孔の初るれ諸  
 事なきんたる民とて感状并馬立刀金帛を以て揚ひ回のよとく  
 和列一團を安堵とてき有下る其外旗下の勇士等も金銀を力  
 を賜ひけり徳大進が故首大八郎を討返し援解のる名とて感状を  
 給ふ是より世人日和見の順を美名とてあより順を今度の裏切  
 と二代の振盪とて世奉て濟すれども武家の計略とていけり乱世の  
 留ひるれば耐えよう句の智謀とて美名たるは如何に況や遂に  
 の先秀ありとてせざるも其身の節義とて是と傳る

何れ時ハ懐心の首首黒にあり順をけ石の陣よりと傍の先秀が陣裏切  
 せし何事の後より後川を頼るや諸書に載とて示さるべき分明  
 志とて或順の裏切を記さるれあり又先秀と合伴の換とて耐と  
 見合せよりとて傍の合戦とて向舟ののりを記せざるもあり耐と  
 と傍の標とてけ石の大橋とていけり後天正二十年春舊道と  
 傍て傳ふるはけらとては懼寓文集にも傍の跡とてい文傳る後の大橋  
 も秀吉の清治世の耐也とせ終るれいけり後にも後るべき示さるべき  
 ともけ耐世の中継とて事跡なき耐るれいづとて示さるべき大和河内へ後  
 まこれたういけりたうい後日考正して後篇とて示さるべき  
 傍の合戦のる詳書の是はありとてたのよと

右板を圖記云舟舟順を方後れを記するのよとて親しんとしてた



其需は應せざる由とされしはにほはるる事也先歳内を平治せんとて下略 惟任の洞が跡とて舟舟を結ぶもく奉らざればはかばかしくして後の城(引)く善法(引)の繩張(引)じ作りたり

右岡軍記右の文也

秀吉善く云先秀自安去引引時待舟吹夢之来不也先秀復其口

二男右河古往の質而不果吹夢遂不到下略

物見記云和初の役人舟舟候入る吹夢先秀一味の者たるは又云き此候を強てお懸とくども和縁とて未出勢せし先秀独身の計議を奉り危を合む下略 人殺下下万六の引時引引るの後又吹夢を振くとくども吹夢終は應せし既して先秀人質して右河古往候を以てし中を述るとくども吹夢是に心せし下略

陰徳吉平記云秀吉備中の陣和懸して上洛せらるるとはへは誰をう語

次まで候して是の二味の約をうるはれと食後せらるる中西を以て中法中一の唯系をうきいされてはくいまんづん其又細い商家去身の候人のお知するに以て若万一にも先秀勝利を以てまん又押ひくは商家危を及ひいまん其厨舟舟候より何系秀吉と力の候よりと中法後又陣して道徳終りまん理立雅くいるんど系より其名をき者い少の諸人の思ひん不もく於舟舟の係る本をあの中西を以ての小冠者より多し復命をさせらるるき人のまひははらばらなごゆら後日の凍語にたよりしらくいびきくといひしは吹夢是の發明の中候とて則中西を秀吉一味の復はまられらる其後先秀と候とて秀吉と候ひお負く引退しに射吹夢も八幡より軍士取上河川の辺とて後軍の



若又百人斗討をより吹草野の勝級を競進する秀吉内心中の懐  
らび思われ遂ともう其獲取の所前より鹿角のふに及び吹草へ  
祝儀のよし宣や遂に信長の旧例のおとくいふく和別一團飲せらる  
ばとて許されり云

老人難信云大和の國を皆其吹草を心えり思ひたるに近より吹草  
大和信長を向ふ抱るめあ和信よりして六ヶ國を吹草遂に明智  
子をとまよとる信長に陣を引け時明智存より信長が方大和洗  
よ和信より信長を引えり云と云信長もと明智大和信より引え  
下を引陣をとり其所の兼院の左衛門も明智より別して懸たり  
おそる大和見難く引く西國もあつたりて下を引明智陣不へ云  
能老より信長を引く云と云信長もと明智大和信より引え

其疾風のまきりに海より小桂川を五里に飛ぶる疾風の玉糸も濡して  
用ひまきりまきりをむらむる大和の先陣お計まきり山中河三段の天守の傍  
寺の辺まきり押来より明智が兵をさへりよ折破るの智と人びり一  
ま龍寺の傍に橋籠るをさへりよ其疾風びぬけて塵のりつる  
ふ料紙より百姓を殺する者あり知れぬ漸日を経て死するもの多く  
る大和明智級心の後より信長皆其吹草野和見たりと遂に大和  
論版より云

和別諸將傳云昨日辰刻日向守光秀より後内務分利三の才大八郎  
利次を以て皆其書翰并にち刀二腰槍又三十巻合又二面を  
持せを以中略 松倉右近勝を進み物より大和の智計を先光秀へ  
日心の首と返送大軍を降城別八幡とて出馬あり彼地は究竟の要



實つらひ憎く在陣世のたまを見合せらるるにさうぢらひ秀吉をとりめ信  
 長慈願の渚に舟を馳せしり吊合戦あり其陣は内通一逆後の赤松切  
 みだしと強て浦多かり中略 日月又日申尅舟舟出馬日月尅尅尅尅  
 まを着て宿陣以下略 又舟舟出馬の陣より舟舟出馬の陣より舟舟出馬の陣より  
 の陣(逃)て云来年来光秀に好むものと云ふも豈大悪の報はよき  
 や依てそまて出馬せむるに其客の上園をば大脱走にさすは近旨  
 光秀と交戦あり其報を足合せ重切致やと云ふ  
 又日舟舟出馬の陣こそよきと云ふと宇田切宮内小泉即即費總及助三  
 余人舟舟出馬飯田三郎兵衛去舟十郎三子余人松倉右近将系右衛門  
 等と云ふして舟舟出馬に余人の舟舟と推しり光秀が舟舟にして討  
 てうけ下略

又日舟舟出馬大和勢二万余人思ひもさう後より時と雲てうま  
 一く惟舟舟方舟舟き就く味は一日は級軍以下略  
 又日信長の舟のどく大和國の大守はと云ふ 麾下の勇将  
 にもさす馬令報を揚り中略 世の人さう日船見の帆菱中  
 是名瓜付て味あかり下略  
 明智軍記云 橋乃尼ヶ橋の小山田七兵衛信澄も光秀が舟舟あり  
 大和郡山の舟舟出馬の日向の次男十次郎を舟舟に逃し  
 舟舟に其好むに付光秀が方より舟舟をて今度の軍は舟舟と  
 逃し舟舟も委細に舟舟に逃し舟舟に舟舟もよ光秀が舟舟と  
 七月廿日復者としてし下略

天正軍記云大和の國舟舟出馬の報進せしり舟舟と



洛之きう一再三復れをきんくくも惟但逆意の同およせ

○山崎の橋のりたは破り凡

山崎名跡志云云橋橋影終凡云橋の方い今の親善寺の前の川畔

から直向所の渡の大橋の南河内街道の内八幡山の坤は尚ほく行方

の人茶店ありけ人家の町山の端より三千間斗水の方其橋の屋

場わうと云其石の古老の流なり固てけ造を橋本と号は然今

云橋本の宿の後世はけ不よう積建る不之け不今の船後云云

又曰渡の大橋下流本は川の末うく西方に桂川伏見川の末と合

て難波に入る中流に橋今の不よう一丁余り水あり孫橋大橋小

橋も皆是夷者この附はる不方う大橋別名長橋和致う極凡

け名今い返橋よと古に橋つらう余の二橋はう古大橋古

是より下にあり下流今に是今の對岸の流り在大橋の西より河

の東を流る河川は入り大橋の下に出之其條今對岸の渡の西端

内へ悉く回廻る今云古川條之下略

山州名勝志云今大橋架本は川末小橋架本は河川末元和元年渡

の橋金藤終の附本は河川治川合て架大橋云

又曰渡大橋東山は河收八村あり是是野里方は是長桑古宇

治川の尾を繞る山付替らるの取はけ造去地泥丸と大橋の西南是

町の新出立おなり云人の云着は是是と渡との間を宇治川本は川

流合く流と云云は瀧川意の致は是是野里を流む又渡川の南

又見つる是是の流も極う支のるを羽よう是是の河收と傳て

大和河内へ通れと云

大和河内へ通れと云



又曰橋本津在八幡之西渡川東南大坂橋なるなりし一山橋本在  
石原又橋本と稱す云々

引惺窩文集曰山八幡橋志摩陸奥の事大明令諸國用乃捨地

舟堅而欲得往還故乃絶古今廢傳遐迩莫討哉中略 山八幡

橋本之難華夷出入之咽喉也中略 於此山口玄番氏豊臣宗永奉

御命其級也長橋中略 其長一百八十回其廣五間柱の數一百  
三十八柱根入地丈餘云々

天正二十年壬辰臘月

又或人の曰く橋の合戦の事此傳并順安河が作又出張して教て勅

光秀級一軍教一為後家臣橋本近安之を以て首二ツを  
秀吉に献じ光秀よりせせがれ首を中遠以秀吉其不忠を惡

むとくも大札の附なるを以て去りてをを室一丈和の國と  
安堵せしむと

光秀級軍

去後よと秀表の合戦惟何方は此の勇まきりいも今の中河の勇且天

王山を歎よき道下りたゆら後田保勢が先さんぐも崩ささら

劍へ旗を掲げ保勢も中河に討ち取らば後田見守流法流見橋

我邊見書用が軍勇を震令ゆをまんと操合せし踏止めて下

知るとくも中河の軍勢勇威盛んはて叶がく刀久るをなれ

二十信者の口より余一人は問及ゆ後馳を放らうけ三方を駆け我が

ぬ斗勢も氣も家も賜を以て後惟何勢切崩れ三隊のゆゑ  
らに札を入難きてを致ひる惟何方の勇士奥田宮内日市女破陣



正山に殿を置き勢を延ばし羽柴方の中河塩川を以て其外を以て我  
 ひ七八夜と探合し悉く討死し士卒三百余人討つる其外を以て  
 ひ寄並河探合し妻木忠元清門に依り羽柴改酒出線左清門村之相  
 守ふ山入候勢安房守上村統後守左田権次松本直勝守新戸  
 石計多尾角守多利時勝頼守とが勢と切結び惣勢を以て  
 我より先秀の先子の三浦(守)三味方敵軍と力争し今旗本  
 の勢を以て我りと自ら馬を急し水より橋板の旗に以て其外  
 馬平次押切大唱一変りれくと和を以て去は兵を以て  
 去来意次老の良渡國を去は大膳を以て意次後の子意次明智兵反先次老秀  
 後秀跡成之の後日族がれ先秀子のむしてせ青一勇士中沢を後守知徳比田希刀則嘉村城二十郎系則安田徳兵衛  
 國次三宅孫十郎朝次塩三之惣後之曰三宅又貞教後内膳恒之

用田右郎公武章山本三九清門討真為はじめし兵卒又万余人討  
 来り味方を踏ましく我々を以て突之れ羽柴方にも生駒  
 軍の又馬守又之の吹也ゆり物々舎分兵守長我々三好  
 孫七郎秀次旗本の勇士加藤虎之助清正後橋市松正則行切権  
 且元中村武部一氏本村隼人定經守本勘兵衛秀次松原七郎在兼  
 門家次石田佐吉三成増田仁右清門長登小西弥九郎新長漏坂新  
 内安基精治助右清門政次長兼大藤左家守其勢一万三千余騎分れ  
 る名將之と勇之といふんぐ切する小南山の軍勢都合又万余騎入れ  
 お我々羽柴方又先秀を討て信長河津の懸に報せんと切をも突  
 をも願惟は勢を以て討て天下と争奪せしものと互に見知り勝  
 軍兵が屍に非ずは跡も逐て名將後世に傳はせんと討るは良



後志とあり誠親の孤保ともいふる足代家の旗指抱入遠へく  
下、五月十三日、本も勅の如き日、人馬渚とも出たて、美  
哉、先秀、今日と誦と詔く、中と切也、いせも勇に羽柴勢陣脚執  
ひく刀入るる、あに侍、先秀、二万余人、先秀の後、う唾と、日又、周と地  
五三、五三、安ま、い、惟、何、勢、討、一、崩、と、立、無、敵、軍、と、ぞ、成、り、以、多、先、秀、  
馬上、長、敵、討、死、の、討、に、来、れ、馬、を、敵、中、に、送、入、ん、と、は、以、回、多、力、進  
七、他、九、溝、門、溝、尾、庄、兵、傍、先、秀、が、馬、の、輿、と、ぞ、い、く、海、も、る、の、沖、後、志  
よ、先、秀、を、合、戦、の、勝、負、其、討、の、運、よ、と、ろ、始、終、の、勝、利、と、ぞ、大、お、こ  
る、者、の、冷、と、は、亦、に、先、勝、龍、寺、の、城、に、引、退、き、移、り、坂、中、龜、心、の  
勢、を、合、せ、く、きて、孤、辱、を、言、き、移、り、馬、の、口、に、引、お、せ、り、先、秀、が、怒、り、  
敗、を、う、り、死、と、き、討、に、死、せ、れ、い、が、死、に、勝、る、孤、あ、う、と、り、此、亦、成、引、ん、と

て名もなき者の多し、悪者、後世に疎さん、武士の恥るるを、是  
取、討、死、と、思、ひ、定、め、れ、い、退、く、ま、じ、と、事、を、に、横、筋、遠、よ、り、の、勢、を、  
一、次、に、先、秀、同、け、近、来、い、が、大、お、は、じ、り、旗、本、の、勇、士、何、れ、の、款、ぞ、と  
そ、と、刀、を、い、れ、世、宙、源、九、溝、門、に、又、り、侍、女、勢、と、合、戦、し、ま、に、ぬ、て、馳、来、り  
作、輿、と、ぞ、い、く、海、も、る、の、沖、後、志、に、引、退、き、移、り、坂、中、龜、心、の、中、に、切、死  
も、信、長、の、ぬ、れ、業、と、ぞ、い、く、苗、も、お、軍、職、と、は、せ、ら、れ、移、り、争、き、御、身、の  
害、と、ぞ、討、死、か、ん、ど、も、強、く、い、ま、え、り、先、秀、の、御、勢、の、中、に、討、死、は、ま、き  
こそ、い、ま、い、け、一、決、心、と、怒、り、も、勢、を、引、上、げ、ま、さ、ぞ、糸、り、甲、斐、あ、ま、  
御、討、死、を、止、め、な、し、い、生、茶、の、本、原、此、と、の、り、や、い、ま、き、け、場、の、不、肖、よ、い、  
い、ま、い、ま、と、い、ち、相、残、る、勇、士、等、令、を、捨、て、我、を、な、ら、る、溝、尾、庄、回  
進、志、の、勇、士、を、百、れ、子、く、勝、龍、寺、の、城、を、御、引、た、り、し、と、血、の、涙、を



流し居る中へ後軍嘯とてこれ来りてさうさうの回音も及べしと柴田  
又子の勢に向ふと馳せし先秀はける心はけり祈りも居下の陣に又勢  
止難くは戦場をたひ返りて比田進士溝尾を以て七百余人を引連て  
勝龍寺の城へ移りける

惟任方勇士等討死

惟任先秀は比田溝尾進士等とてたよと勝を引えりていづと夫發と  
此に惟任勢七裂八載とあるに討る者麻のぶと羽柴本陣が  
軍に方より烈色と情を以て切られ惟任が勇士去後兵をまじをま  
智兵及溝尾又右衛門溝尾兵備進士他之堅進士他九溝堀尾三之堅堀尾三之堅  
内膳先秀が殿軍後放ら等御のぶと考来り歎を右に交たし麻は二三度  
と退りて戦ひしれども其身合石のみざれば皆討死とてさうさう柴田

源左衛門日忠が安田他兵備い主人先秀を落えんとて討死されし  
兵三百余人を一掃とて群々羽柴勢と後合十方に復死しと戦ひ  
二百余人討死三百余人とて得せ皆槍を並べ討死し安田他兵備い  
しと道とて後天輝源右衛門と名なり去諸彦又仕へり本篇柴  
田源左衛門の被埋進勝を以て行後身左馬次先秀が妹聲かたり其外  
の勇士強率我の歎と名遠へいお討とて死するもあり切門切られつ  
夏時の糸に忽と紅の花を用き血を以て標とて見えたり此討死後回  
傳又即い歎を引受け戦ひさうさう味方大軍討死しある勇士長子傳  
兵備重なり安田他兵備之流訪花守堀井新又左衛門にみ余人  
神子信考の先と崇信傳の平回を放ちてみ余人と後合とて  
よと戦ひて歎七十余人討死し進んで戦ふ安田神子の勇士團分佐



後三万余人横槍に入今突如お我々互に勝負も互に  
 大抵信考山洛彈正麻伏を右系等六軍をたておて惣に後回方終  
 又討負悉く討死し傳又即いふ系と傳子員眼は血を動ゆる  
 の方自害せんとする所を即等國本活即外馳し馬よりさのせ候  
 中い殺せし罵しと即終まぐ玄邊(漸)後の小橋をせ船を  
 求め傳又即をのせし落れんとし傳又即け船中を切腹し終  
 死しくぬりしる國本活即今い詮方なりとせと女槍て其身も  
 終に死しりる家も惟但方先陣の大お敵後内親女利三の味方  
 惣敵軍ともぬり或は落れ或は討死七類八割して崩れ終りも其死  
 落れし之數は百余人の士卒を死す家も死す被死にたは死候の

勇を以て縦横を盡し我い一人同業といふをうらむらわれ透回も  
 あつた秀吉の旗本一切入指らるる死んごとく侍を吃と見てあれが  
 一群の軍勢赤地は丸の紋付大旗を立合し七倍りする柝の馬車と  
 立戻りが歩兵を退き内親女兵士に向ひけ款二三七信考をえを  
 うた款先渠を討死しとて一日はあてうれ信考が軍兵思ひう  
 ぶはまかりし東西は廻りしれんぐり崩れしと述うらるるさ  
 とどしと信考の返し合せし踏止り處く中知して我い内親  
 女信考を目かけ文字に切て懸り既く危く刀止し不に津田左内  
 右兵内内又飛し助助日成飛矢那源飛松本新女極極森八郎  
 日森九郎平の兵八郎等の若侍廻隔て討死しる間又信考の幸  
 ちと道とさうけ一戦は津田方三百余人討死し又百余人を員しり



内<sup>く</sup>に<sup>も</sup>勇<sup>を</sup>震<sup>ひ</sup>雷<sup>光</sup>の<sup>お</sup>と<sup>く</sup>羅<sup>ま</sup>る<sup>れ</sup>ば<sup>も</sup>死<sup>して</sup>追<sup>よ</sup>る<sup>者</sup>も  
 ち<sup>に</sup>推<sup>し</sup>入<sup>る</sup>味<sup>方</sup>を<sup>見</sup>れ<sup>ば</sup>悲<sup>しく</sup>討<sup>せ</sup>し<sup>と</sup>力<sup>を</sup>一<sup>人</sup>も<sup>残</sup>す<sup>兵</sup>  
 は<sup>今</sup>も<sup>も</sup>之<sup>を</sup>所<sup>に</sup>敵<sup>も</sup>こ<sup>よ</sup>は<sup>し</sup>遠<sup>く</sup>死<sup>せん</sup>の<sup>と</sup>悔<sup>し</sup>真<sup>に</sup>死<sup>た</sup>ら<sup>ず</sup>  
 へ<sup>も</sup>敵<sup>を</sup>寄<sup>付</sup>じ<sup>寄</sup>り<sup>て</sup>思<sup>ふ</sup>中<sup>に</sup>先<sup>秀</sup>の<sup>勝</sup>龍<sup>寺</sup>  
 高<sup>の</sup>び<sup>終</sup>ふ<sup>と</sup>受<sup>び</sup>じ<sup>し</sup>の<sup>強</sup>お<sup>む</sup>じ<sup>く</sup>大<sup>死</sup>も<sup>一</sup>終<sup>ふ</sup>は<sup>し</sup>我<sup>身</sup>今<sup>も</sup>  
 一<sup>二</sup>十<sup>五</sup>の<sup>勝</sup>も<sup>一</sup>負<sup>じ</sup>し<sup>が</sup>西<sup>定</sup>と<sup>為</sup>り<sup>て</sup>主<sup>人</sup>と<sup>生</sup>死<sup>と</sup>悔<sup>み</sup>と  
 ろ<sup>う</sup>又<sup>い</sup>秀<sup>者</sup>に<sup>進</sup>付<sup>よう</sup>ち<sup>か</sup>か<sup>り</sup>今<sup>日</sup>の<sup>怨</sup>を<sup>と</sup>り<sup>が</sup>た<sup>や</sup>と<sup>忽</sup>一<sup>変</sup>  
 大<sup>に</sup>悔<sup>び</sup>一<sup>方</sup>を<sup>切</sup>破<sup>つ</sup>つ<sup>ぐ</sup>も<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>為<sup>失</sup>た<sup>り</sup>  
 我<sup>書</sup>曰<sup>利</sup>三<sup>信</sup>者<sup>が</sup>勢<sup>を</sup>千<sup>方</sup>は<sup>退</sup>崩<sup>し</sup>自<sup>ら</sup>敵<sup>の</sup>勇<sup>士</sup>又<sup>人</sup>討<sup>え</sup>  
 公<sup>の</sup>子<sup>を</sup>謀<sup>せ</sup>其<sup>の</sup>身<sup>も</sup>又<sup>不</sup>成<sup>を</sup>夢<sup>多</sup>り<sup>終</sup>は<sup>し</sup>信<sup>者</sup>が<sup>身</sup>に<sup>討</sup>  
 死<sup>と</sup>生<sup>年</sup>日<sup>十</sup>歳<sup>と</sup>思<sup>ふ</sup>は<sup>し</sup>敵<sup>軍</sup>の<sup>勇</sup>士<sup>と</sup>な<sup>ら</sup>ず<sup>の</sup>彼<sup>れ</sup>

軍<sup>は</sup>逆<sup>も</sup>身<sup>を</sup>令<sup>せ</sup>ん<sup>や</sup>と<sup>傍</sup>の<sup>合</sup>戦<sup>い</sup>ま<sup>ご</sup>始<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>は<sup>侍</sup>  
 ら<sup>る</sup>に<sup>惟</sup>但<sup>氏</sup>の<sup>運</sup>命<sup>を</sup>察<sup>し</sup>既<sup>に</sup>討<sup>死</sup>と<sup>免</sup>れ<sup>ず</sup>大<sup>八</sup>郎<sup>と</sup>  
 竹<sup>井</sup>勢<sup>の</sup>素<sup>ら</sup>に<sup>伏</sup>屋<sup>利</sup>大<sup>八</sup>郎<sup>の</sup>討<sup>死</sup>を<sup>遂</sup>に<sup>掩</sup>る<sup>も</sup>其<sup>の</sup>  
 身<sup>一</sup>人<sup>け</sup>戦<sup>場</sup>を<sup>隨</sup>は<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>と<sup>言</sup>は<sup>れ</sup>始<sup>終</sup>の<sup>元</sup>氣<sup>を</sup>遠<sup>く</sup>さ<sup>し</sup>  
 と<sup>科</sup>目<sup>の</sup>圖<sup>に</sup>内<sup>務</sup>分<sup>り</sup>右<sup>派</sup>も<sup>秀</sup>者<sup>の</sup>お<sup>も</sup>は<sup>し</sup>せ<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
 と<sup>よ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>死</sup>せ<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>や<sup>後</sup>の<sup>考</sup>へ<sup>を</sup>俟<sup>ち</sup>

羽<sup>柴</sup>流<sup>る</sup>る<sup>者</sup>の<sup>秀</sup>者<sup>の</sup>傍<sup>の</sup>合<sup>戦</sup>十<sup>分</sup>の<sup>勝</sup>利<sup>を</sup>得<sup>る</sup>も<sup>先</sup>秀<sup>の</sup>未<sup>だ</sup>  
 討<sup>死</sup>と<sup>も</sup>取<sup>ら</sup>れ<sup>し</sup>勇<sup>士</sup>數<sup>を</sup>知<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>討<sup>死</sup>五<sup>九</sup>首<sup>數</sup>三<sup>五</sup>七  
 百<sup>余</sup>討<sup>死</sup>五<sup>九</sup>首<sup>數</sup>の<sup>敵</sup>軍<sup>を</sup>幾<sup>ふ</sup>人<sup>と</sup>も<sup>教</sup>を<sup>ま</sup>り<sup>に</sup>羽<sup>柴</sup>方<sup>討</sup>死  
 三<sup>五</sup>三<sup>百</sup>余<sup>人</sup>を<sup>課</sup>に<sup>ま</sup>余<sup>人</sup>も<sup>及</sup>り<sup>ぬ</sup>と<sup>思</sup>ひ<sup>合</sup>戦<sup>と</sup>決<sup>て</sup>若<sup>者</sup>  
 秀<sup>者</sup>震<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>に<sup>十</sup>三<sup>日</sup>の<sup>後</sup>に<sup>秀</sup>者<sup>諸</sup>の<sup>軍</sup>勢<sup>と</sup>傍<sup>の</sup>



の廣野に陣せし無事殺しつゝ獲きたる先首多徳とせしむる  
 け時じしもこの時辺廣しとて今日本船より我ひ言しつゝ  
 かんが味方の陣懸累々と横例の丘のぶく又つに何より  
 足踏不えとれは秀吉が旗本の勇士大おの率陣計の先記難を  
 五のけし首多徳又つと鋒くより堅操操操又例は伏を  
 記難ともこの先首を引く候へ積るゝのふ候しや記難の中  
 を人うとせしむるにみと見ろがむくくとより短刀を振る大お  
 秀吉が同かけ一軍に飛ぶ所行切祐徳を塞ぎ槍を後掛合より  
 彼記難打ち短刀をうりて扱捨る刀引抜き打白ひ秘術を盡し  
 我ひこれ殺す人の勇士もいざや死人のち方打ちつゝ見んやとて  
 己方をなまねん物行切祐徳をよめり其の曲者捕てる細と

同し突外しつゝ二三度透してお合は彼者も密の勇者にて交  
 川の流に踏込く烈敵を力きた行相心感入此奴生捕り叶ふ  
 ほどとちよ喚ひて繰出の槍先たの肩に突抜より被曲者ひろ  
 うがしもこの海の勇者斤切の槍の柄を打たり又切おより行切  
 尋よくち方扱をよむ右の肩先八寸計切割く後首をぞとる  
 ち秀吉が始めに殺すの勇士何者方とよく首取改めよと松  
 明じしを透し見れば是方ん明智十郎左衛門光近の板に死難の中  
 又款の金後隠し居るぞ搜せよとつと殺す何と計多井  
 河多山塩川輝信をなす下の勇士も槍提殺すの記難と突利く  
 及ぶふ山入村と和泉もあ人をけん出れ二人も首取改めよと  
 長の家長はあつり夜の中城首多徳を海に流し分たるを石取張



面は江州後日恩賞の紙に記して瀋軍一統又今日の合戦援解の  
 働きを感称ありて勝の南又は嘗て連て其疾の時陣は臨た  
 まし津戸侍後信若自らきて中河勢平信秀が傍にあり其心を  
 多く今に始りぬるが今日汝が働きは恰も天神の如く是を  
 るぞやかく戦ひは勝利を以て今く本心を遂う其方の戦功を  
 依てなりへつきの附う危を忘るるを以て「神速」は附て其後の  
 方とて流前守秀吉も中河勢平信秀に「中河勢平信秀は」  
 を勢平はく大いに驚き流前守がなむるなふ云葉つた其顔に  
 又天下を我物と為しは形勢之とはざるをきつるこそ滋りよく  
 是りと地がえたり

繪本古圖記に篇卷之に終





